

コロナ禍における 大学での試み

西川 杉子

3月の変事

2020年4月、東京大学は学事歴の変更は一切おこなわず、授業もオンラインで開始した。

しかし2月末の段階では、新年度のオンライン化を予期できた教員は皆無であったと思う。その頃は、教員の多くはまだ試験の採点や年度末の業務に忙殺されていて、毎日のようにニュースになる新型コロナウイルス感染者増加のことも、さほど逼迫したことはとらえていなかっただろう。私の場合は、3月8日からイギリス出張を予定していたため、仕事の合間に気にしていたことは、もっぱら、日本における感染拡大がイギリスの知人たちに「悪印象」をもたらすのではないか——つまり、私の渡英を迷惑がるのではないか——ということであった。結局、3月1日前後と記憶しているが、イギリスの知人からそれとなく「日本からはこないでくれ」と連絡を受けたこと、そして、通勤電車のなかで偶然あった、研究科長補佐をつとめていた同僚に「今、海外に出たら、帰国するにも隔離になるかもしれませんよ」といわれたことが重なって、出張をキャンセルした。ちなみに、その同僚も私も、8月にドイツへの出張を計画しており、「ドイツであいましょう」といってなぐさめあったのだから、コロナ禍が夏まで続くとは思っていなかったのは確かである。大きな危機を前にしても人の想像力は働かないものだ、その後、このあたりのことを何度も思い返すこととなる。

その翌週から状況は加速度的に変わっていった。3月第2週は、様々な通知や注意勧告が飛び交い、多くの委員会が中止やメール審議となり、最終講義や送別会までもなくなった。そして、教授会の前日になって、出席人数を大幅に制限したうえで教授会がZoomによって配信されるという通知がきた。私にとってはこのときが、はじめてビデオ会議システムZoomについて知ったときである。さらに教授会当日には、来年度授業オンライン化の検討が進行していることが伝えられた。

続く3週間は、私の所属する部局、「駒場」こと東京大学教養学部の構成員にとっては、きわめて多事多端な時間となった。はじめてのZoomによる教授会の配信は、

万全とはいいがたいものであり、また当初は、授業オンライン化への懸念がまさっていたのだが、18日に駒場のオンライン化の方針がくだされ、駒場の全教員はオンラインでオンライン授業の講習を受けながら、新たに授業準備をすることになったのである。圧倒的多数の教員がZoom初心者ということもあり、朝に晩にとZoom講習会や研究会、懇談会、そしてTAを使った模擬授業が開催されて、私もそれらについていくのに懸命であった。さらに、キャンパス閉鎖の準備(卒業式も含む)も並行しておこなわれたため、おきている時間はずっとコンピューターにしがみついていたように思う①。

①2020年3月の総合文化研究科・教養学部等の研究科長室の対応については、鶴見太郎「駒場のいちばん長い3月——感染症対策から授業オンライン化まで」(東京大学教養学部『教養学部報』619号(2020年6月1日))を参照のこと。鶴見氏によると、オンライン化の決断には、「英語コース」を運営している駒場ならではの事情や、3月中旬までに北京大学、ハーバード大学が授業のオンライン化をおこなったことが影響した。

授業での取り組み

まず、授業での取り組みについて書く前に、「駒場」こと教養学部のあり方について説明しておこう。「駒場」はよく3層構造で成り立つといわれるが、それは、3・4年生のための専門課程(後期課程と呼ぶ)と大学院のほかに、東大に入学したすべての1・2年生の授業(前期課程)にたざさわるためである。私の場合、前期課程では英語、後期課程と大学院でイギリス近世史を教えている。さらに、前期課程には、2年生の夏に、成績によって、学生を東大すべての学部に分ける重責がある。東大が学事歴を動かさなかった理由の1つには、この進学選択のスケジュールが緻密に設計されており、動かす余地がほとんどなかったためであった。

前期課程:英語 3000人以上の新入生全員が受講する英語は、共通テキストを用いる授業と教員がそれぞれ教材を用意する授業に大別されるが、夏学期の私の担当は前者であった。共通テキストの授業では、成績は平常点と期末の統一試験で評価する(4月初頭ではまだ、対面で期末統一試験をおこなう予定であった)。授業の進め方は各教員にゆだねられたので、私はまず、授業前に学生がテキストを読んでいることを前提として、前もって課題に回答させて、オンラインの時間を極力短くするように心がけた。課題は、学生たちがインターネットの翻訳ツールを使ってしまっただけでは意味がない。*Oxford English Dictionary (OED)*を利用した小テスト形式にして、語句をコンテキストのなかで考えることをうながした。またテキストについては、学生に前もって質問を用意させて、質問のあったところを重点的に解説するようにした。課題と質問についての解説を中心にオンライン授業をおこなったところ、毎回、1時間はあっという間に過ぎてしまった感がある。

学期末の大学全体の授業アンケートの結果では、大半の新入生がオンライン授業を歓迎していた。教員たちは学生の不安を減らそうと、メールやZoomのチャット機能を用いて、学生へのレスポンスをこまめにおこなうことを心がけたが、それがネット世代には歓迎されたい。質問しやすい、録画があるので予習復習が楽、通学時間がなくてよいという声が多かった。一方で、課題の多さ、孤独感を訴える深刻な例も少なくなかったが、オンライン肯定派が多かったことは予想外であった。

前期課程:試験 教員にとって、前期課程でもっとも負担になったのは試験であったかもしれない。また、進振りをひかえている学生にとっては、公平に評価してもらうことが、最大の懸念事項であったようだ。5月、対面での期末試験はおこな

わないと決定されたため、共通テキストの英語については英語部会の全教員と1年生全員を巻き込んで、何度も期末統一試験の模擬をおこなうこととなった。この場合、模擬の目的は内容的なことだけでなく、試験問題のダウンロードなどにもなる技術的なトラブルをなくすことである。私は何度も改定されるマニュアルを勉強して、2回模試に参加したが、統一試験の責任者は9回も模試をおこなったそうだ。その一方で、学生が翻訳ツールなどを使うことも想定されたので、統一試験の作問にも時間がかかっている。試験が実施されたことは評価されたが、実に多大なエネルギーが費やされた。

英語以外の科目では、まず基本的な試験のおこない方のモデルが3通り作成され、どれを選ぶかは教員にゆだねられた(そのために2時間以上の講習会が2回あったが、マニュアル作成の教員はどれほどの時間を費やしたのだろうか!)。もっとも基本的な方法は、だいたい70人程度の学生に試験監督が最低2名ついて、カメラで学生の横顔と手元を映しながら、Google MeetやZoomを組み合わせでおこなうものである。私も理系教員の試験に協力したが、設問の表示の順番を1人ひとりかえるなど、実に細かな工夫がなされていた。ただ、この方法も、学生の協力を得ての模擬試験や3時間以上におよぶ監督教員同士の確認作業が必要であった。学内試験だからこそ可能であったといえるだろう。

後期課程:イギリス史 後期課程については、特殊講義などはもともとオンラインに向いていたといえるのかもしれない。これまでもパワーポイントを利用して授業をおこなう教員がいたが、この形式はほとんど変更なしでオンラインでも用いることができる。学生アンケートの結果も、今後もオンライン授業を続けて欲しいという意見が軽く過半数をこえていた。移動の時間がかからないので、文学部と駒場の授業を両方とることができてうれしいという声もあった。しかし、私としては、学生の反応をみながら授業をおこなえないのは、やりづらさを感じた。また、それ以上に問題に思えたのは、6月下旬まで学生は図書館や研究室の本をほとんど利用できなかったことである。試験のかわりにレポートを課すことを決めて、授業初回に課題は伝えたが、それでも学生の読書がきわめて限定的であったように感じられた。また同様の理由で、4年生の卒業論文作成も、例年より遅れているように思われる。私が卒論指導をおこなっている学生には、Zoomを通して、大学図書館のデータベースや英国図書館のカタログを利用する方法を教えたが、「あの本を所蔵している図書館は利用できない」「この本はアマゾンで取り寄せ中」と、様々な制約が生じている。数年前と比較しても、大学で利用できる電子図書、電子データベースは増加したが、しかし論文の作成をそれだけでおこなうことは無理がある。

大学院:イギリス史 もしかするとコロナ禍でもっとも不利益をこうむったのは、論文作成をしなくてはならない大学院生ではないだろうか。国内図書館が利用できない期間が長かったうえに、資料を取り寄せたくとも、肝心の英国の文書館がロックダウンで閉鎖されてしまった。とくに博士課程の学生にとっては、みずから文書館に足を運び、史料を探し、史料を読みながら自分の議論を組み立てていく作業が、研究者になるための大切な基礎となる。それができないことはどれだけつらいこと

だろう。今年と来年と、おそらくデータベースのみで論文執筆を強いられる大学院生が多いと思われるが、それが1つの「世代」にならないように祈るのみである。

顔がみえない・みせない

4月の授業開始前はZoomというのはテレビ電話のようなもので、お互いの顔を映しだすものだと考えていた。しかし直前に、プライバシーを守るために学生は顔をみせなくてよい(映像のスイッチを切っておく)という通知がきた。したがって、授業の初日に参加者の人数分に仕切られたスクリーンに映ったのは、私の顔と1クラス分の学生の名前だけであった(途中から名前の背景に洒落た写真や絵を使う学生が増えていったが)。その翌週には、教員が顔をみせるとZoomの負荷が増えてインターネット環境が不安定になりやすいので、教員も映像を切っておいた方が望ましいということになった。一對一のチュートリアルならばともかく、多人数の授業ではZoomの負荷をなるべく軽くして、インターネット環境を安定させることを最優先とせざるをえない^②。私の場合は、授業の冒頭だけ顔を出してその日の要点を紹介し、あとは映像を切っておくように心がけた。結局、私たちは、ほとんど学生の顔をみることなく1年近く授業をおこなってきたのである。当初はシニールに感じた状況も、コロナ禍が続くなかで「ニューノーマル」として甘受されている。

②すでに多くの報道がなされているが、オンライン授業はインターネット環境に大きく左右される。秋学期から駒場の構内でも学生がオンライン授業を受けられるように整備されたが、それでも、ネット環境が不十分である。キャンパス内でオンライン授業を受けていて、授業の途中で接続が切られてしまう学生も少なくない。この点、都内の私立大学の方がネット環境の良いところが多いとも聞いている。

ただ、10代の若者の受け止め方は、少し違うのではないかという気もしている。9月中旬には、オンラインでオープンキャンパスがあり(実際はクローズドキャンパスだが)、駒場の後期課程3学科では中高校生の質問にこたえるコーナーが設けられ、私も登壇者の1人として参加した。最初、司会の教員が質問をうながしても誰も声をあげなかった。それがチャットで質問してよいとなった途端、つぎからつぎへと質問が出てきて、3時間の予定を過ぎるほどであった。確かに、中高生が直接、教員に話しかけるのはハードルが高かったのかもしれないが、私には彼らがチャットに慣れているのが印象に残った。顔をみせないでコミュニケーションをおこなう、それは今の10代にとってはもともとの「ノーマル」なのかもしれないと思ったのは、穿ち過ぎだろうか。

おわりに

この原稿を書いている10月末日、コロナ禍は一向に終わる気配がない。最近「コロナ慣れ」という言葉も出てきたが、いまだに、先が見通せない状況は続いており、多くの大学教員は、来年度の計画をたてるのに苦勞しているであろう。たしかにオンライン化は授業や会議の形態の選択肢を増やした。通勤時間がないのはありがたいので、会議の多くは今後もオンライン形式で続けて欲しいぐらいである。ヨーロッパの研究者から、Zoomによる研究会やシンポジウムの誘いも増えた。すべてを否定するつもりはないが、しかし現状では、成績評価や試験をとまなう大学のオンライン化や新たなハイブリッド型の導入は間違いなく大学教員を疲弊させていると思う。文書館に戻り資料に触れる日々を、ひたすら待ちわびている。

(にしかわ・すぎこ／東京大学大学院総合文化研究科)